

母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的検討 —母親の育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連—

中山 智哉^{*1} 渡邊 望^{*2} 春高 裕美^{*1} 木山 徹哉^{*1}

^{*1}九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻

^{*2}九州女子短期大学子ども健康学科

北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2013年11月1日受付、2013年12月19日受理)

要 旨

本研究の目的は、子育て中の母親の育児感情と養育行動や育児を振り返る行為（省察）の関連を明らかにすることであった。また、サポートの観点から、保育所・幼稚園での子育て相談が育児感情に与える影響についても併せて研究目的とした。保育所と幼稚園に通う幼児731名の保護者に対し質問紙を配布し、育児感情、子育ての省察、養育行動、保育相談支援の利用に関する項目に回答を求めた。その結果、「子育て充実感」は、子どもの気持ちを汲み取るなど、子ども理解の視点と関連があることが理解され、さらに子どもに積極的に関与することや、肯定的なかかわりにつながるということが理解された。一方、「子育て不安感・負担感」は、子どもに対して感情的に叱るなどの行為と関連することが理解された。また、保育相談支援は母親の育児不安や育児負担を軽減するなど、育児感情にプラスの影響を及ぼすことが示唆された。

1. 問題と目的

(1) 保護者の育児感情とその関連要因

従来、子育ては家族や地域社会における人間関係の中で行われてきた。だが、近年は核家族化や少子化が進み、子育てに対する価値観の多様化や家族形態、地域内の人間関係も大きく変化していった。こうした社会情勢の変化は同時に育児に対する心理的・身体的負担感を高めるものになり、従来のような親子や一家族だけでは順調かつ容易に子育てを行うことを困難にしている。また、こうした状況で生まれる「育児ストレス」「育児不安」は子どもたちの「育つ環境」にも関わる重要な問題といえる。1980年代に入り、こうした育児ストレスや育児不安など子育てに共通する問題が広く社会一般に認知されるようになった。

先駆的に「育児不安」を研究してきた牧野（1982）によれば、育児不安とは「子どもの現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」であり、乳幼児を育てている母親が抱える「不安」「疲労」「焦り」「イライラ」といった多様な感情面の問題といえる。こうした子育てに対する否定的な感情については、「育児不安」「育児スト

レス」「育児負担」といった側面から、これまで多くの研究が行われている(牧野 1982、寺見・別府・西垣 2008 など)。

一方で育児においては否定的な感情だけでなく、肯定的な感情に着目する研究もいくつかある。柏木・若松(1994)は、母親の育児感情には肯定感情と否定感情がアンビバレントに存在することを明らかにしている。住田(1999)も、育児は母親の肯定的感情がその基底とした上で、育児不安が高まり肯定的感情を上回ると、混乱や不安状態に陥るとの見解を示し、さらに育児肯定感情の高さは、育児ストレス耐性の高さに関連性をすると指摘をしている。これらの研究から、育児感情を考える際に、育児不安・育児ストレスだけではなく、肯定的な感情を併せて検討することが必要といえるだろう。

次に育児感情が実際の養育行動(育児方法)に与える影響を見てみると、育児不安などの否定的な感情は、多くの養育者に共通の感情である一方で、それが過剰になった場合、子ども虐待のリスクとなることが指摘されている(岩堂・松島, 2001)。浦山・金川・大木(2009)の研究では、母親が感じる子どもや夫へのストレスの高さが、不適切な養育行動(例えば「感情的八つ当たり」「傷つける暴言を言う」「顔を平手打ちする」)に有意に関連するとの報告がなされている。また、育児ストレスと母子相互交渉の関連性について調べた長谷川(2007)の研究では、育児ストレスが高い母親は、子どもからの問いかけなどに対して応答性が低いことを明らかにしている。さらに興石(2005)の研究では、子どもに対する統制不能感が高まると育児不安が高まること、また母親が子どもに主導権を与えず自らが場면을統制しようとする不適切な養育行動は、母子間の葛藤を増幅させ、母親の育児不安をさらに高めることにつながると報告している。こうした研究から、母親の育児不安や育児ストレスの高低が、実際の養育行動へ強く影響を及ぼす要因であることが窺える。

さらに近年、保護者の育児感情を規定する要因として注目されているのが、子どもの育ちや育児について保護者がどのように捉えているか、いわゆる子育てへの認知(振り返り)や省察の視点である。臨床心理学の分野では、ストレスを生じるような刺激となる物事(ストレッサー)が同じでも、それに対するストレスの度合いの受け取り方は、その人のとらえ方によって異なるという、いわゆる認知側面に着目した治療法が確立している(Lazarus & Folkman 1984)。このことは、子育てにおいても保護者が育児でどの程度ストレスや不安を感じるか、もしくは充実していると感じるかは、保護者自身の問題や状況のとらえ方によって随分と違ってくることを示唆している。氏家(1995)は、育児における困難な状況をどのようにとらえるかという母親の現実知覚により、その後の状況に違いが生じることを指摘している。また斎藤(2000)も、乳幼児に対するネガティブな感情の認知が母親の育児負担感に影響を与えることを明らかにしている。さらに、朴・杉村(2006)は、日々の具体的な育児行動やそれに伴う自分の認知や感情を、母親がどのようにとらえているのかを知ることは、子育て支援を考える上で重要であると述べ、その理由として親の認知は養育態度の規定要因として働い

ているだけでなく、他の規定要因に比べ親自身がコントロールしやすく、さらに他者もその援助を行いやすいとの見解を示している。これらの研究から、育児感情を捉える視点として、実際の養育行動との関連を調べることと併せて、保護者が自身の子育てをどのように捉えているかという視点に着目することは意義があることに思われる。

(2) ソーシャル・サポートとしての保育相談支援

母親の育児不安や育児ストレスの軽減、もしくは育児肯定感の向上に寄与する要因として、家庭内・家庭外のサポートの有効性がこれまで多くの研究で示されてきた。なかでも夫婦関係におけるサポートに焦点を当てた研究は多く、夫の育児参加が、母親の育児に対する肯定感を高め、制約感を低くすることや（若松・柏木、1994）、夫婦間での会話時間の確保が子育て期の母親にとって疎外感を低減すること（伊藤ほか、1999）などがわかっている。

一方で、こうした家庭内からのサポートを得られない状況にある母親にとっては、育児仲間や専門家といった地域援助の果たす役割は大きい。家庭外のサポートの重要性については、子育てについて話し合える人や交流の場所があることは、ストレス緩和に非常に有効とされている（手島・原口、2003）。現在、わが国の子育て支援の潮流としても、子育て中の母親が集える場の提供（子育て支援拠点事業）が積極的に推進されている。

しかし、積極的に仲間づくりができる母親とは別に、仲間関係づくりが苦手な母親の存在も指摘されている（中西・岩堂2004）。渡辺・石井（2010）は、自己効力感の低い母親は積極的な行動を苦手とする場合が多いため、自ら進んで育児仲間を求めるとや育児サークルへの参加に対し、敷居が高いと感じていると指摘した上で、このような場合、養育者以外に子どもとの接触時間が多い保育士からの情報提供や助言が問題解決の糸口になると述べている。また、荒牧・無藤（2008）の研究では、母親の子育てへの否定的・肯定的感情とその関連要因について検討を行い、その結果、育児に対する「負担感」など否定的感情は夫や友人、そして保育者からサポートが多いほど低く、逆に、「肯定感」はこれらのサポートが多いほど高いことが報告されている。これらの研究を踏まえると、幼稚園や保育所における保育者の相談支援は、育児中の母親にとっての重要なソーシャル・サポートの一端を担っていることが理解される。また、保育者の相談支援活動の重要性は、2008年度に改訂された保育所保育指針において、新たに「保護者に対する支援」の章が設けられたこと、また、同年に改訂された幼稚園教育要領においても、保護者との連携の必要性が述べられることから窺うことができる。

(3) 目的

以上の議論を踏まえ、本研究は次の2つを研究目的とした。

- ① 母親の育児感情と養育行動や育児を振り返る行為（省察）の関連を明らかにする。
- ② 保育所・幼稚園での保育相談支援と、育児感情、養育行動、育児を振り返る行為（省察）の関連性について明らかにする。

本研究の目的設定の理由は、育児不安等の育児感情、養育行動、育児を振り返る行為、それぞれが研究として蓄積されてきているものの、その関連性について述べられている研究が少ないこと。また、それらに対して保育相談支援がどのように影響を及ぼすかについての見解を示す研究がみられないことにある。本研究により、上述で示す要因の関連性が明らかになることは、保育現場における子育て支援や相談支援活動をより具体的・効果的に行うための示唆が得られるのではないかと考える。

2. 方法

(1) 調査対象および方法

幼稚園・保育所を利用している子育て中の母親を対象に質問紙調査を実施した。調査場所は協力を了承してくれた、北海道（2市）、新潟県（1市）、福岡県（3市）の保育所・幼稚園9施設である。質問紙の配布・回収は園を通じて行われ、計1,150名の園児の母親に質問紙を配布、そのうち回答に不備のなかった731名（63.6%）を分析対象とした。調査時期は2012年9月～2012年11月であった。なお、分析には統計処理ソフトSPSS.ver19を使用した。

(2) 調査項目

- ①母親の育児感情に関する尺度：寺見・別府・西垣ほか（2008）を参考に、母親の育児感情について17項目を作成し、5段階評定で回答を求めた。
- ②育児への省察に関する尺度：母親自身の育児への振り返りについて、朴・杉村（2007）を参考に10項目を作成し、5段階評定で回答を求めた。
- ③養育行動に関する尺度：母親の養育スキルについて、三鈿（2008）を参考に11項目を作成し、5段階評定で回答を求めた。
- ④その他、フェイスシートおよび「保育施設への相談しやすさ」を尋ねる項目（5段階評定）を設定した。

3. 結果

(1) 対象者の属性

対象者731名の年齢は、30歳代が最も多く、前半・後半を合わせると約66%を占めている。就労状況を見ると、フルタイム、パートタイム、専業主婦の人数はほぼ同数である。子どもの人数は2人が最も多く約半数であった（表1）。また、全体の100名が母子家庭であったことを書き加えておく。

表1 対象の属性 (母親:731名)

属性	項目	n	%	属性	項目	n	%
年齢	20歳未満	2	0.3	子ども数	1人	215	29.4
	20～24歳	21	2.9		2人	367	50.2
	25～29歳	120	16.4		3人以上	149	20.4
	30～34歳	237	32.4	居住年数	1年未満	81	11.1
	35～39歳	252	34.5		1～3年未満	173	23.7
	40歳以上	99	13.5		3～5年未満	266	36.4
就労状況	フルタイム	250	34.2		6～10年未満	176	24.1
	パートタイム	239	32.7	10年以上	33	4.5	
	専業主婦	242	33.1				

(2) 育児感情・育児への省察・養育行動の因子分析

まず母親の育児感情に関する尺度(17項目)の因子構造の検討を行うため、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、2項目が因子負荷量.40に満たなかったため削除し、再度15項目で因子分析した結果、3因子が抽出された。第1因子は、子育てを通じての喜びや経験の広がり等を示す内容であることから「子育て充実感」と命名した。第2因子は、子育てに対する全般的な不安等を示す内容であることから「子育て不安感」と命名した。第3因子は、子育て中の疲労やストレスなどを示す内容であることから「子育て負担感」と命名した。因子構造の内的整合性を検討するため、各下位因子についてCronbachの α 係数を算出した。その結果、「子育て充実感」.72、「子育て不安感」.78、「子育て負担感」.72であり、概ね良好な値であったため内的整合性は十分であると判断した。なお、3因子の間にはそれぞれ有意な相関がみられた(表2)。

表2 母親の育児感情の因子分析 (プロマックス回転後)

	F1	F2	F3	h2
＜第1因子 子育て充実感＞($\alpha = .72$)				
子育てによって毎日の生活にはりあいができた	.78	.01	-.01	.60
子どもとのふれあいや子育てが楽しく、幸せだ	.68	.02	.19	.59
子育てによって様々な経験ができた	.67	.01	.11	.40
子育てによって家族の結びつきが深まった	.67	-.06	.09	.42
子どもの顔を見ると気持ちが安らぐ	.57	.15	-.20	.41
子育てを通じて人間関係が広がった	.55	.05	.16	.26
子育てを通して自分は成長した	.48	-.14	.05	.25
＜第2因子 子育て不安感＞($\alpha = .78$)				
他の育児と比べて、自分の育児の仕方が正しいのか不安になる	-.03	.80	.02	.66
雑誌等の情報を見ると、自分の育児法が正しいのか不安になる	.02	.78	.01	.60
子どもに問題があるのは、私のせいであると思う	.01	.58	-.04	.31
子どもの食事や栄養に関することが心配だ	.07	.54	-.05	.26
子育てや子どもに関わることに自信がない	-.11	.53	.14	.42

<第3因子 子育て負担感> ($\alpha = .72$)

子育てをしているとイライラすることがある	.06	.06	.68	.48
子育ては大変疲れる	.06	-.01	.68	.43
一人でのんびりする時間が欲しい	.03	-.04	.61	.34

	因子間相関	F1	F2	F3
F1				
F2		-.18		
F3		-.22	.36	

次に、子育てへの省察に関する尺度（10項目）の因子構造の検討を行うため、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果1項目が因子負荷量.40に満たなかったため削除し、再度9項目で因子分析した結果、3因子が抽出された。第1因子は育児の際に子どもの性格を考える、子どもの気持ちを振り返るなどの内容であることから「子どもへの省察」と命名した。第2因子は母親が自分自身の子育てへの振り返りを示す内容であることから「親自身の省察」と命名した。第3因子は、他者の子育てをみて考えるなどを示す内容であることから、「他者の子育て参照」と命名した。因子構造の内的整合性を検討するため、各下位因子についてCronbachの α 係数を算出した。その結果、「子どもへの省察」.75、「親自身の省察」.88、「他者の子育て参照」.67であり、概ね良好な値であったため内的整合性は十分であると判断した。なお、3因子の間にはそれぞれ有意な相関がみられた（表3）。

表3 育児への省察に関する尺度の因子分析 (プロマックス回転後)

	F1	F2	F3	h2
<第1因子 子どもへの省察> ($\alpha = .75$)				
普段子どもの行動をみるとき、子どもの性格や特徴を踏まえながらみる	.77	-.04	-.08	.50
あらかじめ子どもの行動や態度を予測しておくことがある	.68	.02	-.07	.43
子どもをほめたり叱ったりした後、子どもの気持ちを振り返ることがある	.52	.03	.18	.42
子どもと話すとき、子どもの表情や態度に注意することがある	.48	-.05	.21	.36
子どもの将来を見通して育てている	.40	.04	-.08	.23
<第2因子 親自身の省察> ($\alpha = .88$)				
自分の子育て方針を振り返り改善すべきところを考えることがある	-.07	.81	.07	.62
子どもと話した後、自分の言い方が適切かどうか振り返ることがある	.00	.74	-.02	.53
<第3因子 他者の子育て参照> ($\alpha = .67$)				
他の人の子育ての仕方を見て、自分の子育てに必要なことに気づくことがある	-.10	.00	.92	.77
他の人が子どもにどのように接しているか注意深く見ることがある	.13	.00	.55	.38
	因子間相関	F1	F2	F3
F1				
F2		.40		
F3		.40	.33	

最後に、実際の育児方法に関する尺度（11項目）の因子構造の検討を行うため、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果3項目が因子負荷量.40に満たなかったため削除し、再度8項目で因子分析した結果2因子が抽出された。第1因子は、子どもを励ます等の内容であることから「積極的・肯定的関心」と命名した。第2因子は、感情的に叱ってしまう等の内容であることから「感情的な叱責」と命名した。因子構造の内的整合性を検討するため、各下位因子についてCronbachの α 係数を算出した。その結果、「積極的・肯定的関心」.78、「感情的な叱責」.80であり、概ね良好な値であったため内的整合性は十分であると判断した。なお、因子間に相関はみられなかった（表4）。

表4 養育行動に関する尺度の因子分析（プロマックス回転後）

	F1	F2	h ²
<第1因子 積極的・肯定的関心> ($\alpha=.78$)			
何が良かったのか子どもに伝えながらほめる	.77	.03	.57
子どもが困っているときには、良い解決策と一緒に探す	.70	.02	.48
何か家事をしていても、子どもの様子や状況をできるだけ把握するようにする	.69	-.04	.47
子どもが困っているとき、言葉で励ます	.67	.05	.46
どんなに忙しくても、子どもと話したり一緒に遊んだりする	.47	-.08	.23
<第2因子 感情的な叱責> ($\alpha=.80$)			
感情にまかせて子どもを叱る	-.08	.84	.71
子どもが言うことをきかないと、大声でどなりつける	.06	.80	.65
因子間相関			
	F1	F2	
	F1		
	F2	.02	

(3) 育児感情と育児への省察・方法の関連

まず、育児感情と子育てへの省察の関連を調べるため Pearson の積率相関係数による分析を行った。その結果、「子育て充実感」と「子どもへの省察」「他者の子育て参照」の間に低い正の相関がみられた。また、「子育て不安感」「子育て負担感」は、「親自身の省察」「他者の子育て参照」との間に低い正の相関がみられた（表5）。

表5 育児感情3因子と子育てへの省察3因子の相関

	充実感	不安感	負担感
子どもへの省察	.27**	-.05	.03
親自身の省察	.08	.27**	.19**
他者の子育て参照	.20**	.26**	.14**

**=p<.01

次に、育児感情と養育行動の関連について調べるため Pearson の積率相関係数による分析を行った。その結果、「子育て充実感」は、「積極的・肯定的関心」との間に正の相関がみられ、「感情的な叱責」との間に低い負の相関がみられた。一方、「子育て不安感」「子育て負担感」は、「積極的・肯定的関心」との間に値は低い負の相関がみられ、「感情的な叱責」との間には正の相関がみられた (表 6)。

表 6 育児感情 3 因子と養育行動 2 因子の相関

	充実感	不安感	負担感
積極的・肯定的関心	.37**	-.16**	-.15**
感情的な叱責	-.21**	.32**	.41**

**= $p < .01$

(4) 保育相談の利用と育児感情の関係

保育相談支援が母親の育児感情に影響を及ぼしているのかを調べるため、「相談しやすい」と回答した群 (559 名)、「相談しづらい」と回答した群 (66 名) の 2 群に分け、それらを独立変数、育児感情の 3 因子を従属変数とする被験者間要因による t 検定を行った。なお、「どちらともいえない」と回答した 106 名は対象から除外した。その結果、「相談しやすい」と回答した群は「相談しづらい」と回答した群に比べ、「子育て充実感」は高く、「子育て不安感」「子育て負担感」は低いという結果が示された (表 7)。

表 7 「相談しやすい群」と「相談しづらい群」による育児感情の比較

		n	平均値	SD	t 値
充実感	相談しやすい	559	31.79	3.21	6.56**
	相談しづらい	66	28.97	4.04	
不安感	相談しやすい	559	15.06	3.98	3.71**
	相談しづらい	66	16.97	3.67	
負担感	相談しやすい	559	11.81	1.82	3.77**
	相談しづらい	66	12.83	2.1	

**= $p < .01$

次に、「相談しやすい」「相談しづらい」それぞれの群によって、育児感情と子育てへの省察について、相関関係に違いがあるかを調べるために Pearson の積率相関係数による分析を行った。その結果、「相談しやすい」と回答した群、「相談しづらい」と回答した群、双方に「子育て充実感」と「子どもへの省察」「他者の子育て参照」の間に正の相関関係がみられ、また、「子育て不安感」「子育て負担感」と「親自身の省察」「他者の子育て参照」に正の相関関係がみられた。また「相談しづらい」と回答した群は、「相談しやすい」と回答した群に比べ、すべての因子間で高い相関関係であった。また、「子育て負担感」と「子どもへの省察」

の間には、「相談しづらい」と回答した群にのみ相関関係がみられた（表8、9）。

表8 育児感情因子と省察因子の相関
[相談をしやすいと回答した群（559名）]

	充実感	不安感	負担感
子どもへの省察	.22**	-.05	.01
親自身の省察	.04	.25**	.17**
他者の子育て参照	.12**	.26**	.15**

**=p<.01

表9 育児感情因子と省察因子の相関
[相談をしづらいと回答した群（66名）]

	充実感	不安感	負担感
子どもへの省察	.34**	-.01	.27**
親自身の省察	.11	.37**	.42**
他者の子育て参照	.38**	.42**	.31**

**=p<.01

最後に、それぞれの群によって、育児感情と養育行動について、相関関係に違いがあるかを調べるために Pearson の積率相関係数による分析を行った。その結果、「相談しやすい」と回答した群、「相談しづらい」と回答した群、双方に「子育て充実感」と「積極的・肯定的関心」の間に正の相関、「子育て充実感」と「感情的叱責」の間に負の相関がみられた。また、それぞれの群の「子育て不安感」「子育て負担感」と「感情的な叱責」の間には正の相関がみられた。（表10、11）。

表10 育児感情因子と養育行動因子の相関
[相談をしやすいと回答した群（559名）]

	充実感	不安感	負担感
積極的・肯定的関心	.29**	-.14**	-.16**
感情的な叱責	-.24**	.33**	.44**

**=p<.01

表11 育児感情因子と養育行動因子の相関
[相談をしづらいと回答した群（66名）]

	充実感	不安感	負担感
積極的・肯定的関心	.50**	-.17	-.06
感情的な叱責	-.24**	.25**	.38**

**=p<.01

4. 考察

(1) 育児感情と省察行為の関連

育児感情と子育てへの省察の関連を調べるため相関分析を行った。その結果、「子育て充実感」と「子どもへの省察」の間に低い正の相関がみられた。また、「子育て不安感」「子育て負担感」は、「親自身の省察」との間に低い正の相関がみられた。この結果から、子育てに対する充実感は、「普段子どもの行動をみるとき、子どもの性格や特徴を踏まえながらみる」、「あらかじめ子どもの行動や態度を予測しておくことがある」などの、子どもへの共感的理解の視点と関連があることが理解された。荘厳ら（1989）は、母子相互作用における母親の応答性や反応性は、母親の感情的安定と密接に関連していると述べており、本研究も同様の結果が示されたといえる。

一方、「子育て不安感」「子育て負担感」は、母親が自身の育児方法への振り返りと関連があることが示された。興石（2002）は、養育者が自己の感情に注目しやすいくと対処不能感が高まり、育児不安が高まることを指摘している。また、産後うつ病に罹患している女性を対象にした調査からは、罹患者は子どもが泣くことで焦り、イライラし、自分を責める気持ちや他人に迷惑をかけていると感じていること（福本 2005）、また子どものサインの読み取りが有意に少ない（森岡ら 2006）ことなどが報告されている。もちろん産後うつ病と育児不安感・負担感を同様に扱うことはできないが、これらの知見と本研究の結果をまとめると、育児への負担感や不安感の高まりは、母親が自分の子育てを否定的に捉えてしまうなど、ネガティブな自己注目意識を高めると同時に、子どもの気持ちに寄り添う視点を弱めてしまう可能性があることが示唆される。

最後に「子育て充実」「子育て不安感」「子育て負担感」全てに低い正の相関を示したのが、「他者の子育て参照」であった。子育て仲間などのネットワークが、子育て不安やストレスを低減することは、これまで多くの研究で示されてきた（例えば手島・原口、2003）。しかし一方で、他者の育児方法を見ることで自分の育児に自信をなくすこと、他者から自分の子育てがどのように思われるのか不安になること（東ほか、2009）、子どもの発達を比較し不安になること（平成12年度幼児健康度調査）など、ネットワークが逆に母親の不安につながる場合も少なからずあることが指摘されている。本研究の結果は、こうしたプラスとマイナスの両方の側面を反映したものとといえるのかもしれない。

(2) 育児感情と養育行動の関連

次に、育児感情と養育行動の関連について調べるため相関分析を行った。その結果、「子育て充実感」は、「積極的・肯定的関心」との間に正の相関がみられ、「感情的な叱責」との間に低い負の相関がみられた。一方、「子育て不安感」「子育て負担感」は、「積極的・肯定的関心」との間に値は低い負の相関がみられ、「感情的な叱責」との間には正の相関がみられた。これらの結果から、「子育て充実感」は、子どもに積極的に関与することや、肯定的な

かわりにつながる事が理解され、一方、「子育て不安感」「子育て負担感」は、子どもに対して感情的に叱るなどの行為と関連することが理解された。村松（2006）は、母親の衝動的な感情に焦点を当てた研究の中で、子どもに対する衝動的な感情は、わだかまり（育児不安）となって母親の心を循環し、子どもをしつける時に生じる衝動的な感情を惹き起す要因（育児ストレス）につながることを指摘している。また、感情的な叱責やスパニングが多いほど子どもの問題傾向の程度が高くなること（三鈷 2008）、そうした子どもの問題行動が親のストレスをさらに高めること（栗川 2004）なども指摘されている。本研究での結果やこれらの知見を踏まえると、養育態度に関連する親の育児感情をどのように支えるかは、保育相談支援の中で重要な視点になるといえる。

(3) 育児感情と保育相談支援の関連

保育相談支援が母親の育児感情に影響を及ぼしているのかを調べるため、「相談しやすい」と回答した群（559名）、「相談しづらい」と回答した群（66名）の2群に分け、平均値を比較した。その結果、「相談しやすい」と回答した群は、「子育て充実感」をより感じており、「子育て不安感」「子育て負担感」は低いという結果が示された。これらの結果から、保育相談支援の利用しやすさは、母親の育児感情に影響を及ぼしていることが理解された。手島・原口（2003）は、子育て中の母親へのソーシャル・サポートとして、母親同士が気軽に話せる環境や子どもが遊べる場所とともに、子育ての専門家によるサポートが育児不安の軽減に有効であることを示している。本研究で示された結果も、先行研究と同様に、保育相談支援が母親の育児不安などネガティブな育児感情の軽減につながることで、また育児への充実感を向上させる要因となる可能性を示唆するものといえるだろう。

次に、「相談しやすい」と回答した群、「相談しづらい」と回答した群の2群において「育児感情」が「子育てへの省察」「養育行動」とどのように関連しているか、それぞれ特徴を探るため、群別に相関分析を行った。「育児感情」と「子どもへの省察」との関連についてみると、「相談しやすい」「相談しづらい」の両群ともに、「子育て充実感」と「子どもへの省察」「他者の子育て参照」の間に正の相関がみられ、「子育て不安感」「子育て負担感」は「親自身の省察」「他者の子育て参照」との間に正の相関がみられた。ただし、相関の程度をみると「相談しづらい」と回答した群は、「相談しやすい」と回答した群に比べ、それぞれの因子間、特に負担感と省察行為の相関が高い結果となっている。これらの結果から、保育相談支援を利用できていない母親ほど、育児に対する不安感や負担感と、母親自身が育児方法を振り返る行為（親自身の省察）、他者の子育てと自分の子育てを比べる行為（他者の子育て参照）が、強く結びつきやすいことが理解される。つまり、保育相談支援は、母親が自身の育児を振り返ることや他者の子育てを参照することにより高まる不安感や負担感（もしくは逆に、不安感や負担感が高まることで、自身の育児を責める、人と比べてしまうといった思い）を軽減する効果があるといえるかもしれない。しかし一方で「相談しづらい」と回答した群にのみ、

「子育て負担感」と「子どもへの省察」に正の相関がみられたこと、また「相談しやすい」と回答した群に比べ「子育て充実感」と「子どもへの省察」「他者の子育て参照」の相関が高い結果が示されていることから、今後、保育相談支援によるサポートの有無による、母親の育児中の感情体験と子育ての省察する行為の関連性について、質的調査などを含めたさらなる検討が必要といえるだろう。

最後に、「育児感情」と「養育行動」の関連について、それぞれの群で相関分析を行った。その結果、「相談しやすい」と回答した群、「相談しづらい」と回答した群、双方に「子育て充実感」と「積極的・肯定的関心」の間に正の相関、「子育て充実感」と「感情的な叱責」の間に負の相関がみられた。また、それぞれの群の「子育て不安感」「子育て負担感」と「感情的な叱責」の間には正の相関がみられた。両群の相関の程度の違いをみると、「子育て充実感」と「積極的・肯定的関心」の間の相関に両群の違いがみられたが、それ以外の因子間にはさほど大きな違いはみられなかった。これらの結果から、保育相談の利用のしやすさは、「育児感情」と「養育行動」の結びつきにあまり影響を及ぼさないことが理解された。このことは保育相談支援によるサポートの有無にかかわらず、不安感や負担感が高まると子どもに対して感情的に接してしまう、また逆に子育てに対して充実感を感じているほど、肯定的・積極的なかわりが増えるということを示唆している。ただし、上述の結果で示されているとおり、そもそも保育現場での相談のしやすさが、子育てへの充実感を高め、また不安感や負担感を軽減することを踏まえると、保育相談支援のサポートの有無が、ポジティブ・ネガティブそれぞれの養育行動の出現頻度に影響を及ぼすことは間違いないといえるだろう。

5. 本研究の課題

本研究の課題としては、以下の3点が挙げられる。第一に、本研究では子育て中の母親に対するソーシャル・サポートとして、保育相談支援以外のサポート資源との関連について検討がなされていない点である。夫や親族からのサポート、子育て仲間が存在など、母親の育児感情に影響を与えるその他のサポート資源と併せて検討することで、保育相談支援が育児感情へ及ぼす影響や特色、またより効果的に支援を行うための示唆が得られるのではないかと考える。第二に、本研究では調査対象として乳幼児を育てる母親全てを対象としており、子どもの年齢や人数を考慮していない。今後は、子どもの年齢、人数など子育ての状況を含めた検討が必要といえる。第三に、「育児感情」「子育てへの省察」「養育行動」それぞれの尺度の信頼性・妥当性の問題である。今回の研究では、協力者への負担を考え質問数を限定して調査を実施した。そのため、因子分析の段階で下位因子の項目数が少なくなり、各構成概念(各因子)の内容が、それぞれの事象を十分に反映したものとはいえないだろう。今後、質問項目を再度検討し、調査を継続する必要があるだろう。

謝辞

本研究にご協力いただきました保育所、幼稚園の先生方や保護者の方々に、心よりお礼申し上げます。

引用文献

- ・荒牧美佐子 安藤智子 岩藤裕美 金丸智美 丹羽さかの 立石陽子 砂上史子 掘越紀香 無藤隆
2004「幼稚園における子育て支援の利用状況：育児不安との関連から」お茶の水女子大学
子ども発達教育研究センター紀要、17-26
- ・荒牧美佐子・無藤隆 2008 「子育てへの負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：
未就学児を持つ母親を対象に」発達心理学研究、19 (2)、87-97
- ・東雅代 西村真実子 米田昌代 井上ひとみ 梅山直子 宮中文子 堅田智香子 和田五月 松井弘
美 2009 「乳幼児をもつ母親の育児困難の状況」石川看護雑誌 Vol.6、1-10
- ・朴信永・杉村伸一郎 2006 「子育てにおける親の省察モデルの検討」広島大学大学院教
育学研究科紀要第、55号、373-381
- ・朴信永・杉村伸一郎 2007 「子育てにおける親の省察尺度の作成に関する予備的研究」
幼年教育研究年報、29、23-30
- ・福本祐子、石原千絵子、 渋川敏彦 2005 「産後うつ病と育児ストレスに関する実態調
査、第9回（平成16年度）島根県母性衛生学会学術集会シンポジウム一般演題」島根母
性衛生学会雑誌、9、65-69.
- ・長谷川麻衣 2008 「母親の育児ストレスと母子関係－縦断研究による検討－」 Human
Developmental Research Vol.22、37-48
- ・平成12年度幼児健康度調査報告書（社）日本小児保健協会『日本子ども資料年鑑2001』
日本子ども家庭総合研究所・社会福祉法人恩賜財団母子愛育会編 KTC 出版13p
- ・伊藤裕子・池田政子・川浦康至 1999 「既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の
影響」心理学研究、70、17-23.
- ・興石薫 2002 「母親の自己注目傾向と育児不安について」小児保健研究、61、475-481
- ・興石薫 2005 「育児不安の発生機序」日本小児科学会雑誌、109 (3)、337-345
- ・Lazarus、R. S.、 & Folkman、S. Stress、appraisal and coping. 1984、11-21.
Springer. (本明寛・春木豊他訳『ストレスの心理学：認知的評価と対処の研究』、2007.
実務教育出版).
- ・中西美紀・岩堂美智子 2004 「幼児を持つ母親の仲間関係と育児困難感－内的ワーキン
グモデル尺度を用いて－」生活科学研究誌、Vol.3、107-114
- ・三鈷泰代 2008 「幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究－養育スキルと子ど
もの行動傾向との関連」発達研究、22、181-190

- ・森岡由起子、佐藤文、佐藤奈緒子、生地新 2006 「産後うつ状態を呈する母親の情緒応答性について」第59回日本心身医学会東北地方会演題抄録、心身医学46、253.
- ・村松十和 2006 「育児中の母親の心理（衝動的感情と育児不安）と夫との関係に関する研究」三重看護学誌 Vol.8、11-20
- ・斎藤友介 2000 「幼児の問題行動が母親の育児負担感におよぼす影響」The Journal of Tokyo Academy of Health Sciences、3 (2)、103-108
- ・佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則 1994 「育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関係」、心理学研究64巻6号、409-416
- ・荘巖舜哉・益谷真・今川真治・中道正之 1989 「母親の感情表出スタイルと13か月齢の子供の感情行動」教育心理学研究、37、353-358.
- ・首藤敏元・馬場康宏 1995 「母親の育児感情と幼児の社会的コンピテンスに関する研究 埼玉大学紀要 教育学部（教育科学）」、44、1、53-67
- ・手島聖子・原口雅浩 2003 「乳幼児健康診査を通じた育児支援：育児ストレス尺度の開発」福岡県立大学看護学部紀要、1、15-27.
- ・寺見陽子・別府悦子・西垣吉之・山田陽子・水野友有・金田環・南憲治 2008 「今日の母親の育児経験とソーシャル・サポートの関連に関する研究（1）」中部学院大学・短期大学部研究紀要第9号、59-71
- ・氏家達夫 1995 「乳幼児と親の発達」麻生武・内田伸子（編）、講座生涯発達心理学第2巻、金子書房
- ・渡辺弥生・石井睦子 2010 「乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について」法政大学文学部紀要、第60号、133-145

Factors Affecting Emotions of Mothers Concerning Child-rearing

Tomoya NAKAYAMA^{*1}, Nozomu WATANABE^{*2}
Hiromi HARUTAKA^{*1}, Tetsuya KIYAMA^{*1}

^{*1}Department of Education and psychology, Faculty of Humanities,
Kyushu Women's University

^{*2}Department of Childhood Care and Education
Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

This study examined the following two points: (a) the associations between the emotions of mothers rearing infants and self-reflection of own child-rearing behaviors. (b) the effects of counseling and support to guardians at a nursery school and kindergarten upon parental emotions of the child-rearing practices. The questionnaires were distributed to 731 mothers of the nursery schools and kindergartens to ask about the emotions of own child-rearing, self-reflection of child-rearing, child-rearing behaviors, and use of counseling and support in child care. The results indicated correlations between: (a) the presence or absence of the mother's ability to understand the feelings of children, the positive interactions with their children, and the feeling of fulfillment in child-rearing. (b) the anxiety and burden of child-rearing and the behavior of scolding emotionally. (c) providing counseling and support in child care and reducing the level of parent's anxiety and burden of child-rearing.